公益社団法人千葉県隊友会　令和4年11月号（2022.11.26）

館山支部だより　Vol.113

＜支部連絡窓口＞
千葉県隊友会館山支部
事務局(代表) 川 村　巌
〒294-0032 館山市笠名1357
TEL 0470-22-0230

晩秋に咲く桜　冬　桜＜寒桜＞
＜11月中旬 拙宅の庭先にて＞

師走も間近、今年最後の支部だよりをお届けする時節となりました。2020年に始まったコロナ禍でしたが、3年経った現在まだ過去のことではなく、年末年始にかけて第8波の発生が警告されるなど、依然として予断を許さぬ状況が続いております。

コロナ禍の一日も早い完全終息とともに、会員諸兄のご自愛、益々のご健勝と幸多い新年を迎えられるよう祈念申し上げます。

＜支部長＞

支部の活動概要

≪10・11月活動実績≫

10.10(月) 館砲校予備学生戦没者慰霊祭（安房神社）
11.18(金) 館山航空基地殉職隊員追悼式
11.26(土) 支部役員会(コミセン、別法)

≪12・1月活動予定≫

1月初　21空群司令への年始表敬挨拶
（自衛隊OB三団体代表）
1. 24(土) 支部役員会（コミセン）

館山航空基地殉職隊員追悼式　11/18(金)13:45～14:30

令和4年度殉職隊員追悼式が基地隊員代表と歴代群司令、館山自衛隊協力会会長（市長）はじめ自衛隊協力団体及び自衛隊出身OB団体代表等参列のもと粛々と執り行れました。

昭和28年8月、館山航空基地開設以来、その職に殉じた11柱の尊い御魂の慰霊と永くその功績を顕彰するため建立された「悠久之碑」を前に、殉職隊員の紹介、儀仗隊による敬礼、黙祷に始まり、追悼の辞、参列者による献花、最後は儀仗隊の弔銃発射で締めくくられました。

第21航空群司令による追悼の辞では、哀悼の誠とともに隊員一同その意思を継承し、謙虚におごることなく、全力で職務に精励する旨 力強い決意表明がありました。

＜支部長＞

＜追　懐＞ S41.11、101航空隊に着任して間もないころのこと。

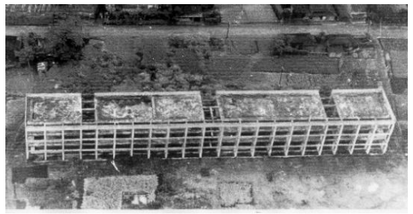
年明けの16日、折しも厳冬訓練の初日、早朝出勤早々知らされたのは、徳島沖で夜間共同訓練中の101空HSS-2と徳島基地のS2-Fが空中接触し、両機とも海上に墜落という、青天の霹靂とも言うべき にわかには信じ難い悲惨な事故の発生でした。

当日、徳島に派遣され現地連絡幹部として収容関連の諸作業に携わりましたが、一縷の望みも空しくほどなく全員の殉職が確認され、徳島基地で合同部隊葬が執り行われました。 殉職された福地2佐はじめ5名の搭乗員の方々とはごく短期間の勤務関係でしたが、その時の感懐は今でも鮮烈に脳裏に焼き付いております。

大儀に殉じられた11柱の御魂に、改めて深甚な慰霊の意を表してやみません。

＜川　村記＞

＜館山航空基地・悠久之碑＞
（S43. 6. 5 建立）



＜旧州ノ埼海軍航空隊・光学講堂＞
（撮影時期及び撮影者不祥、
館山航空基地広報室提供）

終戦数年後の上空から撮影された写真と思われるが、窓ガラスや目ぼしい建築材はすべて持ち去られた荒廃した佇まい。

約５０棟の州ノ空の建物の中で唯一の鉄骨コンクリート３階建構造で、修復の上、昭和３８年に開校した国立海員学校の校舎として平成１０年頃まで使われた。

トピックス

第39回危険業務従事者叙勲受章

黒田 幸男会員（海、21整補隊） 瑞宝双光章（防衛功労）受章

晴れのご受章を心から祝福申し上げます。＜支部会員一同＞

随　想「終戦後７７年・戦争体験の無い者の戦争観（後編）」

＜前々号から続く＞ このところ*北朝鮮*のミサイル発射試験が異常ともいえるほど頻繁に行われている。その多くは日本海に向けられており、先月初めに発射された長射程と思われる弾道ミサイルが、日本本土の上空を横断して太平洋に向けて発射されたという判断の下に、すかさず通過地点に当たる新潟、山形地方に「Jアラート」が発令された。 結果的に発射されたミサイルは日本海で消滅（着弾？）し、防衛大臣から訂正のコメントが出された。何しろ相手の意図も分からないし、じっくりと精査などしておれない、寸秒の躊躇も許されない状況下で、予測・判断の狂いが出ることも必然であろう。

メディアのインタビューに応じた市民等のコメントは、「身近に防空壕や公共の避難施設があるわけじゃなし、無意味なアラートは止めて欲しい」とか、出港準備中の漁師は「人騒がせなことは止めて欲しい、我々には生活がかかっているのだ」等々。

要するに「他国から攻撃を受けることに対する脅威」が、国民に「現実的なもの」として捉えられていないのである。

「国民保護法」は制定されたが国民の間に違和感がはびこり、このへんに防衛を考える上での問題の核心的なものがあると思う。

*頻繁にロシアからの*ミサイルや無人機の攻撃に晒されているウクライナでは、都市部には防空壕や公共の地下避難施設などが数多く設けられ市民の保護に役立っている。 他国からの攻撃を受けた場合の備えとして国策として推進されたもので、ロシアのウクライナ侵攻当初、アゾフ大隊が長いこと持ちこたえたアゾフスタリ製鉄所の頑強な地下施設は市民の避難にも役立った。

第1次・第2次世界大戦で戦火に晒された欧州各国では、避難用の地下施設の構築に相当な力を注がれている。永世中立国のスイスでは各家庭に核シェルターの建設が義務付けられている。

*日本も前大戦では*空襲の脅威が現実化したS19年末ごろから各家庭でも防空壕の建設が本格化した。とは言え資材も男手も少ない状況で地下に穴を掘っただけの防空壕は、直撃弾はもとより至近弾にも耐えられるものではなかったと言われる。

欧州各国の家庭の防空壕や地下鉄を含む公共の避難施設は、直撃弾に耐える設計とともにある程度の生活機能（寝具、食糧、上下水道設備など）を備えていると言われる。 地下40mに建設された最近の東京の地下鉄施設は、直撃弾にも十分耐え得る構造強度と言われるが生活機能は全く備わってない。最初から避難を考慮して設計されたものではないのである。

言わんとすることは、日本には防衛（軍備）に対する考えはあっても、他国から攻撃を受けた場合の国民の命を守るという考えが希薄であると言うこと。それ以前に、国民の間に他国から攻撃を受けるという観念がないと言った方が適当なのかもしれない。

「戦争とはこちらから仕掛けるもの」という考え方、憲法9条で戦力の保持を禁じ、交戦権を認めなければ 戦争に巻き込まれる怖れは（絶対に）無いという考え方が一部の政治家や多くの国民に根強く、水と空気と米以外に資源の乏しい日本を侵略する国などあり得ない、と言った地政学的な思考の欠如がこれらに拍車をかけているのだろうか。

大袈裟に「戦争観」と題して述べたが、「憲法、不戦の決意」だけで「（他国からの攻撃を含めた）戦争防止・回避はできない」と言うのが、戦争体験のない（空襲体験しかない）者の考え方である。

≪匿名、85歳、海≫

戦時のハイテク集団「州ノ埼海軍航空隊の術科教育」

以前、ここで「戦時のマンパワー集団」と題して、州ノ埼海軍航空隊（以下「州ノ空}）が戦闘指揮所壕やマンモス防空壕など自隊の築城施設の構築にとどまらず、他部隊の防備施設さらには本土決戦準備のための築城施設等の構築に多大のマンパワー（作業人員）を派出したことについて述べたが、肝心の本業、すなわち兵器整備術科教育の方はどうだったのであろうか、気懸かりなところである。

飛躍的な航空兵器の進歩に応えるため、S18年半ばに教育機関として開設され、「射爆」、「光学」、「無線」及び「偵察写真」の兵器整備術科部門が設けられたが、電探（レーダー）は藤沢に開校（S18年）した電測学校が、魚雷は横須賀空が担当するなど一極集中を避けたものなのであろうか。 紙面の関係でここでは「射爆兵器」と「光学兵器」のごく特徴的な事項に絞って述べることにする。

射爆兵器・・戦闘機パイロットの命「機銃の照準調整」

射爆兵器整備の要は、固定機銃を装備する戦闘機の照準調整であろう。分解整備を終えた機銃を機体に取り付ける際に、照準調整は必須の手順であり、最終的にはプロペラの回転数を戦闘出力に近い状態で機体の姿勢を保持しながら数十発を試射し、標的の弾痕分布から照準調整を判定する手順が繰り返される。 当時の戦闘機（零戦）は2連装、4連装が主流で、試射は各機銃ごとに行いその都度エンジンを止め、標的を取り換えるなど実に手間のかかる作業であったであろうことは想像に難くない。州ノ空の南側の山間 （山あい）にある5カ所の射撃場の標的壕（トンネル形状のコンクリ製門柱）には、今でも無数の弾痕が残っている。機銃の照準調整の適否が空中戦を制し、戦闘機パイロットの生命を握っていると言って決して過言ではない。

光学兵器・・大がかりな爆撃照準用教材？

掲載した写真のように、資材が極端に不足した時代に光学講堂だけなぜ手間ヒマ（期間）かけてコンクリ構造にしたのであろうか。必然的に竣工も遅れ開校時にはまだ完成していなかったと言われる。その理由は謎に包まれている。

教育上の必要からくるものとも考えられ、光学兵器専攻の予備学生の回想記に光学講堂の一角に建物とは構造上独立した3階から1階に突き抜けた広い空間（スペース）があり、そこに無数のプリズムを組み合わせた大きな爆撃照準用の教材があったという記述がある。

地震や通行車両の振動はもとより、建物が受ける風圧や（人体に感じない）無感地震の影響を避けるためには、柔軟性のある木造建築では無理なことから、鉄骨・セメント資材をふんだんに使い、工期を費やした構造を選択したのであろうか。このへんにも教育効果を重視する州ノ空の取り組みを見るようである。

航空兵器整備ハイテク要員の急速養成というニーズ*に応えるため開隊された州ノ空であったが、戦局は教育に専念することを許さず、彼らのマンパワーは冒頭に述べたように思いもかけぬ築城作業に振り向けられた感がある。しかし一方では過酷な条件・制約のもとで、本来の使命達成に向けた懸命な努力が払われていたと見るべきであろう。*

≪自称地域史探索マニア　その37≫